

「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の現状と今後

日本文化研究所の研究事業である「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」は、平成23年度に開始され、事業期間は3か年である。

平成23年度の事業の概要については、平成24年度刊行の『日本文化研究所年報』第5号にて既報であるので、ここでは平成24年度の事業の概要の紹介をもって現状報告とし、今後の展望についても簡単に述べたい。

1. 内部研究会

この研究事業で最も頻繁に行われているのは、週1回（原則として死木曜午後）開催される内部研究会である。事業で行われている分野のうち、主たるものは国学基本テキストの読解と国学関係史料の整理・読解であり、それぞれ隔週で行っている。平成24年度は国学基本テキストとしては平田篤胤『古史伝』を重要なテーマに関わる箇所を中心にメンバー全員で読み進め、平成25年度も継続中である。秋田の草稿本を参照しながら読んでいる点は他にはない特色であろう。

国学関係史料としては、高玉家宛平田鋳胤書簡の読みについて難読箇所を中心に確認を進めた。これも平成25年度にも持ち越している。旧日本文化研究所の近世社家文書研究会以来、継続して翻刻を進めてきており、紀要類に翻刻を掲載してきたが、改めて本文の翻刻を確実なものとし、基本事項に注を付して、全体を一冊の本として刊行することを目指している。

3. 第3回国学研究会

第3回国学研究会は、平成25年2月8日（金）、吉田麻子『知の共鳴 平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会を実施した。詳細については「第3回国学研究会 吉田麻子『知の共鳴 平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会」を参照していただきたい。

4. 京都出張報告

今回の資料調査は、神葬祭・靈魂観を中心に社家出身国学者の思想的背景を探ることを目的として、平成25年3月17日（日）から20日（水）の4日間実施した。神葬祭は、資料調査で対象とした荷田春満・大西親盛の稲荷社、六人部是香の向日社などの社家出身者にとっては克服すべき課題であり、研究のモチベーションともなったため、見逃すことはできない問題である。

まず、3月17日は、向日市文化資料館において小林・三ツ松・武田の三名で調査を行った。まず、向日市の向日神社にて正式参拝の後、向日神社から向日市文化資料館への寄贈資料の閲覧・撮影許可をいただいた。その後、向日市文化資料館にて向日神社社家、六人部家の寄贈資料の仮目録を精査し、所蔵されている平田篤胤関係の資料、『古史伝』や『靈能真柱』等を確認し撮影を行った。六人部家に気吹舎から『古史伝』の写本が送られていることは、渡邊金造の著書等で明らかにされていたが、その実物と思われる『古史伝』が確認された。その本文には板本以前の

内容が含まれている。これは、秋田県公文書館に所蔵されている篤胤自筆稿本の本文修正箇所が反映されたものである。しかしながら頭注等の書き込みで反映されていないものもあり、六人部家所蔵本と自筆稿本を比較する事により『古史伝』形成過程が、より明確になるものと考えられる。

3月18日は、京都府立総合資料館にて午前中は小林・三ツ松・武田の三名、午後からは松本が合流し、四名で調査を行った。京都府立総合資料館においては、伏見稻荷大社の旧社家である大西家文書(乙)を中心に調査を行った。まず、仮目録の精査を行った後、『日本書紀神代卷』、『六月晦日大祓』等の書誌情報を確認した(書誌情報については別添資料を参照)。これらの文献から、大西親盛の学問への関心の深さがうかがわれる。こうした親盛の学問を考察していくため、東丸神社所蔵の文献等との比較検討が必要と考える。

3月19日は、松本・武田は京都府立総合資料館にて、小林・三ツ松は向日市文化資料館にて引き続き調査を行った。

京都府総合資料館では、主に葬儀関係の資料を閲覧し、仮目録を一部複写した。葬儀関係資料からは、稻荷社において部分的であるが、神葬が行われている事が注目される。一瞥したところによれば、大西家当主の葬祭のみならず、18世紀以降の氏人・妻女を含めた稻荷社の葬祭の方式であったと考えられる。また、東羽倉家史料においては葬儀関係の史料がほとんどなく、日記などで推測していた点が、大西家の史料を比較する事によって、春満の没前後において神葬祭が実施されていたであろうとした推測がほぼ正しかった事が証明されたと考える。向日市文化資料館では、17日の延長として六人部是香関係の資料を調査し撮影を行った。六人部是香の著作である『古道本義伝』は本居宣長の『古事記伝』と平田篤胤の『古史伝』を比較して著

された文献であり、17日に調査した史料とあわせ、重要な文献と考える。また、旅日記を含む六人部の日記類には平田篤胤が京都を訪れた文政六年のものもあり内容を精査する必要がある。また、向日市寺戸墓地内にある六人部家の墓を参拝し撮影を行った。六人部家の墓は向日神社から約1キロのところにある寺戸墓地にあり、代々の神主は小ぶりの墓にそれぞれ埋葬されている。特に文久3年に逝去した六人部是香の墓には「豊秋津彦建甕魂命之墓」とあり、神葬祭であった可能性が高いように思われる。

3月20日は、松本のみにより、京都市立右京中央図書館(京都市右京区太秦下刑部町12)にて、資料調査を実施した。主に、地方自治体発行の地方史を中心に閲覧しつつ、昨日までの史料調査を整理した。神葬祭の問題は荷田春満・大西親盛の稻荷社、六人部是香の向日社などの社家出身者にとっては克服すべき課題であり、研究のモチベーションともなったため、見逃すことはできない。稻荷と同様に上七社の一である賀茂社(上賀茂社)の場合、寛文・延宝期以降、次第に神葬祭が実施されるようになると思われるが、その形態は稻荷同様に寺院・僧侶が関与する折衷的なものであったことが窺われる(京都府愛宕郡役所編『愛宕郡志』の上賀茂村の項(『洛北誌』大学堂書店 昭和44年 pp.191-192、所収)。但し、上賀茂の場合、僧侶が墓前で焼香・念仏を行う点が、これに関与しない稻荷とは異なる。これらの事実は、近世中期において、上七社クラスの神社の葬儀のあり方に一定の方向性があったことを推定させるものである。なお、村上紀夫『近世勧進の研究—京都の民間宗教者—』(法蔵館、2011年)の第I部第二章「近世における松尾社の本願」によれば、松尾社は十九世紀初期に本願が退転する。本願との争論が幕末まで続く稻荷と、さしたる問題の生じなかった上賀茂との中間形態を示している。松尾社の葬儀形態

についても、今後調査が必要であろう。

5. 今後の展望

「國學院大學国学プラットフォーム」のこれまでの活動は、基本的に国学に関する基礎的研究を予算規模や人的組織の規模の限りにおいて、蓄積するという形で続けられてきた。平田篤胤の『靈能真柱』（全文のHTMLファイル）や『古史伝』（全文の画像データおよび部分的な注釈データ）といった、これまでの成果については、今後さまざまな調整を経たうえでデジタル・ミュージアムでの公開の可能性と方法を考える必要がある。

また、平田高玉家宛平田鋳胤書簡については、現段階では研究者の間では書籍としての利用のニーズのほうがデジタルデータよりは大きいという性質をもつものであり、すでに述べたように刊行に向けた具体的な青写真を作成する必要がある。

学内外の国学研究者の交流のためのプラッ

トフォームという点では、まだ途上にあるという感が強い。参加している若手研究者が研究業績を重ねてきているものの、人的ネットワークの広がりには学内についてすら、まだ不十分である。ただし、平成26年度は学内における共同研究である21世紀研究教育計画委員会研究事業「古事記に関する国際的・学際的研究」と連携して行う国学研究の観点からの古事記研究史の研究が主たる課題となる予定であり、古事記研究という具体的テーマを核にして、学内外の国学研究者のネットワークを現在以上に広げることになる。ここ数年の人員の異動に伴って、平成25年度は国学部門によるこの研究事業は、研究開発推進機構の専任教員が関与しない事業となっているが、平成26年度以降は専任教員の主体的参加を含めて、事業の内容と運営方法を検討しつつ、さらなるネットワークの拡大と充実に向けて進まなければならない。

（遠藤 潤・武田幸也）